Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

ガンダムごっこに関する研究〈その1〉

――ガンダムごっこについての保育者のイメージ――

○村松三恵子　太田恵子　（横浜学園付属元町幼稚園）

《研究のねらい》

ガンダムに代表される闘いを中心としたあそびは音声・攻撃的な身振り・物が介在する複雑な（多面的な）活動であるが、このような活動に対して保育者はどのようなイメージをもっているか。次の5つの観点から調査した。

1. 活動の存在について。
2. 保育室内の活動として、どのような応対を必要とする活動とみているか。
3. ガンダムに代表される闘いを中心としたあそびは、どのような意味をもっているか。
4. ガンダムに代表される闘いを中心としたあそびは、どのような学習（研究）の必要のある活動とみているか。
5. 保育者のこのあそびの意味づけ方とこのあそびの対処との関連。

《方法》

質問紙を作成し、横浜市中区の幼稚園13園に各5枚づつ計65枚配布し、32枚回収した。回収率49％である。質問紙の内容は上記の5つの観点がとらえられるように、次のような項目について自由に記述してもらった。　イ．活動の有無　ロ．活動の認否　ハ．具体的な対処　ニ．活動の意味の有無　ホ．研究の必要性の有無　その他。

《結果》

1. 活動の存在について

（表-1）

承認	否定	無記入	合計
30	0	2	32

活動の存在については、表-1にみられるようにアンケート回答者32名のうち無記入2名を除いて全員が何らかの形で闘いあそびを認めている。

2. 保育室内の活動として、どのような対処を必要とする活動とみているか。　〈※注：延回答数〉（表-2）

対処＼様態		音声	身振り	物の要求	けんか	合計
かかわる	積極的	37	5	0	0	42
	中立的	0	6	19	21	46
	拒否的	2	29	8	6	45
傍観		2	10	8	18	38
その他		5	1	4	6	16
合計		46	51	39	51	187

回答者32名が延187の対応を示しているが、全体の71％はこの活動に直接のかかわりを示している。かかわりの内容をみると、積極的・中立的・拒否的なかかわり方がほぼ等分に分布している。次に子どものあそびの様態別に保育者のかかわり方の傾向をみていくと、次のような特色がみられた。

①音声による働きかけは、応対・応戦といった積極的なかかわり方が圧倒的多数を占めている。

②身振りによる働きかけでは、約束・注意・禁止に代表される拒否的なかかわり方が1番多く（57％）、次いで傍観が多い。

③物の要求に関しては、時と場合によって保育者なりの判断を下したり、要求をしてきた子どもにその使用目的を尋ねる他、実際に新聞紙・広告紙・ダンボール等の素材を渡すなど中立的なかかわりが大半を占めている。

④けんかについては、子ども同志で話し合いをさせる等の中立的なかかわりと、危険が伴わない限り見守るといった傍観的な対処が圧倒的多数を占めている。

以上のことから全体をみると、闘いあそびがどのような形態をとるかによって保育者のかかわりは異なり、保育者は自らのかかわりを調整していることがわかる。つまり音声では最も積極的に、身振りに関しては拒否的・傍観的なかかわりを示す傾向が強く、また物の要求については中立または消極的であるということである。

3. ガンダムに代表される闘いを中心としたあそびは、どのような意味をもっているか。

自由に記述したものの傾向を分類すると、活動の意味を子どもに即して発見している場合と保育者自身のためという観点から発見している場合とに大別され、前者（子どもに即した意味のとり方）が圧倒的に多い。また子どもに即した場合、対人関係に意味のある活動としている者が多い。　（表-3）

(1)子どもに即して		(2)保育者に即して		(3)その他	(4)無記入	(5)合計
(1)-1 自己の願望実現	(1)-2 対人関係的	(2)-1 道徳的	(2)-2 保育手段的			
7	9	3	1			
16		4		5	7	32

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

4.ガンダムに代表される闘いを中心としたあそびは、どのような学習（研究）の必要がある活動とみているか。

（表-4）

(1) 必要あり				(2) 必要なし			無記入	合計
保育者の認識の深化	あそびの発展・健全化	平和教育	未分類	無干渉	無規	無記入		
13	3	2	5	3	1	1		
23				5			4	32

３２名のうち２３名（７２％）がこのあそびに関する学習の必要を認めており、必要の理由の中では、保育者の認識の深化が大半を占めている。また、不必要と回答した者の理由は、この活動が子どもだけで築く活動であるため無干渉としている。

5.保育者のこのあそびの意味づけ方とこのあそびの対処との関連。

表5に示されるように、意味づけを子どもに即してとらえるか、自分自身に即してとらえるかによって、あそびへのかかわり方が著しく異なる。つまり、前者は後者の4.4倍を占めている。また、意味づけの内容とかかわり方との関連では、対人関係的な意味を見い出す保育者が音声では積極的、身振りでは拒否的と傍観的なかかわりが多く、物の要求に関しては中立的なかかわりが他よりも圧倒的に多い傾向が見られる。しかし、このあそびの意味に関して無記入であっても、結果2の傾向をとっており（音声―積極的、身振り―拒否的・傍観的、物の要求―中立的・消極的）、保育者は必ずしも意識しなくても、保育者のかかわり方を均一にする強力な働きがあると考えられる。

〈考察〉

結果1において、承認が圧倒的に多いことから、保育者がガンダムあそび（闘いあそび）を単に乱暴なあそび・人を傷つけるあそびと決めつけていないことがわかる。また結果3において、子どもに即した意味を持つという回答が多いにもかかわらず、結果4では、保育者の認識の不足という現状がはっきりと現われており、このあそびが意味ある活動であることを感じつつ、放置されている現状がうかがえる。また、結果2からは、ガンダムあそび（闘いあそび）に対する保育者のイメージのある種の傾向がはっきりした。すなわち、保育者が子どもたちのするガンダムあそび（闘いあそび）の様態に対処する際、その活動の中に「危険」場面を見い出すか否かで保育者のかかわりが大きく変化する傾向のあることである。つまり、「危ない」と思った瞬間から保育者は拒否的なかかわり（禁止・注意・約束等）をしたり、あそびに使う物の要求に対しては、一様に「紙」という素材を与え、危険度をやわらげる配慮を無意識のうちに行っている。また、結果5からは、子どもに即して意味を見い出す保育者の方がこのあそびに、より積極的にかかわりを示しているが、その他の点では、音声では積極的、身振りでは拒否的・傍観的、物の要求では中立的というステレオタイプの行動がみられている。

以上のことを総括すると、保育者は、ガンダムあそび（闘いあそび）に関して肯定的なイメージをもっている反面、危険状況の発生を契機に、あそびの対応の仕方が分化する傾向のあることがわかった。したがって、このあそびは、ただ単に子どもにのみ任せてはおけない、保育者の介入の必要な緊張をはらんだあそびといえよう。保育者は、このあそびについてより認識を深めることで、今後、健全な人間関係を伸ばしていけるかかわり方を多数見い出していくべきではないだろうか。

（表-5）

様態	音声						身振り						物の要求						合計	
意味付＼対処	a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	f		
自己願望実現	9		1	1			3	1	5	1				5	3			1	30	70
対人関係	10			1	1	1	3	1	8	4				8	3				40	
道徳的	2		1		1				4	1				3					12	16
保育手段的						1			1					2					4	
その他	6					1	1		4	1		1		4	1			1	20	20
無記入	10							2	7	3				5	1			2	30	30
合計	37	0	2	2	2	3	7	4	29	10	0	1	0	27	8	0	0	4	136	
	46						51						39							

※注 対処a―積極的かかわり
対処b―中立的かかわり
対処c―拒否的かかわり
対処d―傍観
対処e―その他
対処f―無記入

NII-Electronic Library Service